

奄美とブラジル移民

Amami Migrants and Brasil

田島 康弘

TAJIMA Yasuhiro

目次

- 第1章 研究目的
- 第2章 移民輩出地域の検討
 - 1. 日本の移民輩出地域と鹿児島県
 - 2. 県内の移民輩出地域と奄美
 - 1) 戦前
 - 2) 戦後
 - 3. 奄美における輩出地域
- 第3章 奄美からブラジルへの移住
 - 1. 宇検村からのブラジル移住者数
 - 1) 『海外移住者名簿』
 - 2) 『焼内ぬ親がなし』
 - 3) 『在伯鹿児島県人発展史』
 - 2. 宇検村民のブラジル移住の経過
 - 1) 1918年
 - 2) 1924年
 - 3) 1930年
 - 4) 戦後の渡航
 - 3. 入植とその後の生活
 - 1) 戦前の入植と生活
 - 2) 戦後の入植と生活
 - 4. 生活の展開—1965年当時の職業
- 第4章 ブラジルから日本への来住
 - 1. 日本への出稼ぎ者の増大
 - 2. 宇検村関係者の来日の経過
 - 1) A.S.さん
 - 2) M.S.さん
 - 3) K.K.さん
 - 4) I.K.さん
 - 3. 帰化問題
- 第5章 結語

第1章 研究目的

本研究のスタートは、1980年代の後半、喜界島からのアメリカへの移民について調べている中で戦前の1920～30年代に、とりわけ宇検村からのブラジルへの移民が多いことを、当時の鹿児島県統計書の資料から知ることになったことである。1992年、宇検村を対象として国内人口移動の調査を行った際にも、このテーマを可能な限り追究することを考え、湯湾集落のブラジルからの帰国者の一人に人の紹介を通して面会し、直接話を聞いたことがあったが、その際はこれ以上の追究はできなかった。そして今回1996年7月ようやく、ブラジル移民のテーマを中心とする調査を宇検村で行う機会を持つことができたのである。

前回の'92年には、湯湾の帰国者の存在が唯一の手掛り¹⁾であったが、今回は調査準備の段階で芦検集落に居住するブラジルからの帰国者や日系ブラジル人女性の存在を知ることができた。

そこで、これらの人々の行動から浮かび上がってくる、近年における宇検村とブラジルとの関係を明らかにすることを本研究の第1の目的とした。

ブラジルからの帰国者や日系ブラジル人の存在は、かつて奄美からもかなり人々がブラジルに移住したことを前提していることは言うまでもない。こうした戦前および戦後の移住の実態や移住の経過をできるだけ明らかにすることが、本研究の第2の目的である。

さらに、移民輩出地域の考察を行なうことにより、移民現象における奄美地域の位置づけについても検討を加えておきたい。これが第3の目的となる。

記述の順序としては、今述べた順とは逆の順で述べることになる。

さて、移民という言葉は一般に国家間の人口移動を意味する言葉として使われている²⁾。そしてこの国家の枠組(統合・分裂など)や国家を構成する諸民族さらには諸民族の中の少数民族の問題やこれへの関心が現在高まっている。移民問題は単なる人口移動という現象ではなく、こうした国際社会の関係という現代世界の構造や問題と深くかかわっている問題の1つであることを再確認しておきたい。そして、こうしたわくの中で、本稿で対象としたような当事者たちの生活や問題が存在することを忘れてはならない。

調査のための直接的準備は1996年6月から始め、現地調査は7月後半に行なった。これには11名の学生の協力を得ている。具体的には、宇検村の教育委員会を通して、結婚して芦検集落に居住している日系ブラジル人女性のうちの1人を紹介してもらい、彼女との打合せの結果、7月22日の夕方、芦検の公民館で話し合いを持つことが決った。当日の相手側の出席者は、結婚して芦検集落に住む日系ブラジル人女性の中の4名、ブラジルから帰国したA. K. 氏とその奥さん、帰化手続きに努力されているA. S. 氏、海外移住家族会のM. T. 氏の他、ブラジル人女性の配偶者の方や兄弟姉妹が移住しているという方まで含め十数名の方々であった。

全体での質問や話し合いのあと、(1)戦前の移住の状況、(2)戦後の移住の状況、(3)近年のブラジル

から日本への人の動き、という3つのテーマで、3つのグループに分かれて、更に詳しい話を伺った。これらの話の内容については、学生各自のレポートとしてまとめられている。

これに先だって前日には、海外移住協会のM. T. 氏から氏の親戚家族の移住当時の状況について、また、A. S. 氏からは帰化問題について、湯湾集落にある村の中央公民館に来ていただいて話を伺っており、また、翌日には、ブラジルからの帰国後、何組かのカップルの成立の仲介をされたA. K. 氏の話のほか、ブラジルからの女性たち数人にも個別に面接し、ききとり調査を行なった。

第2章 移民輩出地域の検討

1. 日本の移民輩出地域と鹿児島県

日本からの海外移民は東北日本より西南日本に多く、とりわけ九州沖縄地区で多い。戦前³⁾、移民輩出の多かった上位10県をあげてみると、1) 広島、2) 熊本、3) 沖縄、4) 福岡、5) 山口、6) 福島、7) 長崎、8) 鹿児島、9) 東京、10) 和歌山の各県となっており、このうちの8県は西南日本に、5県が九州・沖縄にある。移民者総数約75.3万人のうち九州・沖縄地区で約26.3万人を占めており、これは34.9%に当たる。

戦後⁴⁾の移民総数は53,657人で、戦前の10分の1以下と少ないが、この都道府県別の輩出地域をやはり多い順に並べると、1) 沖縄、2) 熊本、3) 東京、4) 福岡、5) 北海道、6) 長崎、7) 福島、8) 山口、9) 鹿児島、10) 和歌山の各県となり、やはり西南日本が7県、九州・沖縄が5県を占めていて、この5県の全体に占める割合は38.9%であった。ここに現われている都道府県も9県までは同じであり、戦前あった広島が戦後はベスト10から消え、代りに北海道が入ってきている点だけが異なっている。

以上みたように、日本の移民輩出地域は西南日本とくに九州・沖縄が中心であり、この中では、熊本、沖縄、福岡、長崎、鹿児島の諸県が多くの移民を輩出してきた県であることがわかった。

鹿児島県は以上5県の中では少ない方であるが、全国的にみれば移民輩出の多い県であると言える。先の統計によれば、戦前は25,712人で日本全体の3.4%、戦後は1,616人で同じく3.0%を占めており、上位からそれぞれ8位と9位に位置していた。

2. 県内の移民輩出地域と奄美

さて、次に鹿児島県内ではどの地域からの移民が多いのだろうか。鹿児島県海外協会から1965年に発行された『海外移住者名簿』に依拠して、これについて検討しよう。

1) 戦前

戦前の移住者の輩出地域を本名簿により整理する場合2つの方法がある。その1つは本書内の「戦前渡航者国別ABC順」の資料に依拠する方法であり、もう1つは「戦前ブラジル移住者送出名簿」の資料に依拠する方法である。前者は戦前に海外渡航した世帯で、1965年当時の居住者を国別に記

載したものであり、従って、戦前渡航した当事者でも死亡した者については記入されていない反面、渡航後の出生者の記入がある。すなわち、この名簿は渡航者数よりも1965年当時の居住者の把握に重点を置いている。

これに対し後者は渡航者数それ自身を示しており、渡航者の出身地もわかるので輩出地域の把握のためにはこちらの方が良いのであるが、資料が「ブラジル移送者」のみであり、北米関係者が欠落していることが欠点である。

結論的には、筆者は後者を採用することにした。前者の資料から、1965年当時の国別居住者数は北米約1,300人、南米約9,300人と推測でき、本県の海外居住者のうちの90%近くは南米居住者であると言える。従って、ブラジル渡航者だけでも、県内輩出地域の基本的特徴を把握しうると考えられるからである。

そこで、後者の資料を整理した結果を次に示そう(第1表)。

第1表 戦前におけるブラジル渡航者の出身地

市 郡 名	世帯数	人数	割合(%)
鹿児島市、谷山市、鹿児島郡	111	475	9.0
指宿市、揖宿郡	77	281	5.3
枕崎市、加世田市、川辺郡	551	1,684	31.8
串木野市、日置郡	58	220	4.1
川内市、薩摩郡	51	274	5.2
出水市、阿久根市、出水郡	53	241	4.5
大口市、伊佐郡	23	111	2.1
国分市、始良郡	263	940	17.7
曾於郡	24	101	1.9
鹿屋、垂水市、肝属郡	49	219	4.1
西之表市、熊毛郡	12	58	1.1
名瀬市、大島郡	120	698	13.2
計	1,392	5,302	100.0

まず、市と郡とをあわせた市郡別でみると、最大の輩出地域は枕崎市・川辺郡の31.8%であり、次いで国分市・始良郡、名瀬市・大島郡、鹿児島市・鹿児島郡の順となった。

次に、より詳細に輩出地域をみるために市町村別に整理した結果(第2表)をみると、坊津町、枕崎市、加世田市、顛娃町などの南薩地区、とくに坊津町と枕崎市の南薩西部に最大の輩出地域が

あること、次いで、国分市、隼人町、始良町地区に第2の輩出地域の核があり、大島郡宇検村地区⁵⁾に第3の、鹿児島市地区に第4の核がそれぞれあることが読みとれる。

第2表 戦前にブラジル渡航者の多かった市町村

順位	市町村名	世帯数	人数
1	坊津町	190	677
2	枕崎市	211	597
3	宇検村	73	440
4	国分市	117	404
5	鹿児島市	85	360
6	隼人町	69	251
7	加世田市	97	244
8	穎娃町	40	181
9	始良町	23	99
10	垂水市	19	92

以上のことから、戦前における海外移民の輩出地域は、第1に南薩西部地区、第2に鹿児島湾奥（国分・隼人）地区、第3に大島郡・宇検村を中心とした地区、第4に鹿児島市を中心とした地区の4つであると整理することができよう。

2) 戦後

戦後の渡航者については、出身市町村別に統計が整理されている。ただ、一般の「戦後渡航者」と区別されて「米国難民法関係渡航者」が扱われているため、この両者を加えなければならない。

戦後渡航者の輩出地域を市町村別に示した第3表によれば、全体的にみて輩出地域にそれほど大きなかたよりがみられないことが、一つの特徴と言えよう。ただ、やはり戦前と同じく、南薩地区や国分・始良郡地区が多い他、北薩や大隅の各地区でも多くなっている。これらに比べ名瀬市・大島郡が比較的少ないが、これは当地区が1958年まで占領下にあったという事情も考慮されねばならないだろう。

第3表 戦後における海外渡航者の出身地

市郡名	一般		米 国		合 計		割合(%)
	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数	
鹿児島市、谷山市、鹿児島郡	49	136	11	26	60	162	5.3
指宿市、揖宿郡	51	169	93	221	272	390	12.7
枕崎市、加世田市、川辺郡	99	260	51	110	150	370	12.0
串木野市、日置郡	66	137	70	146	136	283	9.2
川内市、薩摩郡	99	327	1	3	100	330	10.7
出水市、阿久根市、出水郡	38	114	1	1	39	115	3.7
大口市、伊佐郡	36	136	7	16	43	152	4.9
国分市、始良郡	102	319	18	38	120	357	11.6
曾於郡	92	286	7	17	99	303	9.9
鹿屋市、垂水市、肝属郡	105	299	2	2	107	301	9.8
西之表市、熊毛郡	40	119	6	18	46	137	4.5
名瀬市、大島郡	47	174	0	0	47	174	5.7
計	824	2,476	267	598	1,091	3,074	100.0

つぎに、より詳細にみるために、戦後渡航者の輩出地域を市町村別にみると(第4表)、輩出者の多い市町村は、1) 穎娃町、2) 国分市、3) 串木野市、4) 加世田市、5) 鹿児島市、6) 大口市、7) 鹿屋市、8) 川内市、9) 有明町、10) 西之表市の順となり、従来の南薩地区と国分地区以外の地区からの移住者がふえていることがあわかる。輩出地域の分散化がみられると言えよう。

第4表 戦後に海外渡航者の多かった市町村

順位	市町村名	一般		米 国		合 計	
		世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数
1	穎娃町	34	135	89	216	123	351
2	国分市	38	169	6	13	44	182
3	串木野市	13	32	61	128	74	160
4	加世田市	33	72	37	73	70	145
5	鹿児島市	35	101	10	25	45	126
6	大口市	25	101	6	14	31	115
7	鹿屋市	37	108	1	1	38	109
8	川内市	32	93	0	0	32	93
9	有明町	21	86	1	2	22	88
10	西之表市	19	65	6	18	25	83

以上、戦前と戦後とを合わせた結果をまとめてみると、県内における移民輩出地域は第1に南薩地区、第2に鹿児島湾奥の国分・隼人地区、そして第3に宇検村を中心とした奄美地区、第4に鹿児島市を中心とした地区となって、渡航人数の圧倒的に多い戦前の結果とほぼ同様の結果が得られ

たと言うことができる。

3. 奄美における輩出地域

奄美地域は県内最大の移民輩出地域ではないが、海外移住者がかなり多い地域であることは既に見た通りである。しかし、この奄美地区内でも場所により大きなちがいがみられる。

奄美の海外移住者を市町村に戦前、戦後ともに示した第5表によると、全体の83%が上位3市町村で占められ、その中でも宇検村からの移住者が56.4%と圧倒的多数を占めている。この宇検村に隣接する瀬戸内町も多い方で、宇検村を中心とする奄美大島南部に輩出地域の中心があると言うことができよう。この他では人口の多い名瀬市が多い程度で、他の町村ではきわめて少ない。

第5表 奄美における移住者の輩出地域

市町村名	戦 前		戦 後		計		人数の 割合(%)
	世帯数	人数	世帯数	人数	世帯数	人数	
宇検村	73	440	12	52	85	492	56.4
名瀬市	12	82	14	57	26	139	15.9
瀬戸内町	19	82	2	11	21	93	10.7
笠利町	3	20	6	14	9	34	3.9
伊仙町	2	14	4	8	6	22	2.5
天城町	3	13	1	9	4	22	2.5
住用村	2	22			2	22	2.5
竜郷町			3	17	3	17	1.9
和泊町	1	8	1	1	2	9	1.0
知名町	2	7			2	7	0.8
大和村	1	3	2	2	3	5	0.6
徳之島町	1	5			1	5	0.6
与論町			2	3	2	3	0.3
喜界町	1	2			1	2	0.2
計	120	698	47	174	167	872	100.0

別の資料である『在伯鹿児島県人発展史』⁷⁾によっても、本書に登場する32の奄美出身世帯のうち半数の16世帯が宇検村出身者であることから、奄美内における宇検村からの移住者の比率の高さを知ることができる⁸⁾。

第3章 奄美からブラジルへの移住

1. 宇検村からのブラジル移住者数

まず、宇検村からのブラジル移住者数について、2～3の資料から明らかになることを整理しておこう。

1) 『海外移住者名簿』

本書の中の「戦前ブラジル移住者送出名簿」及び「戦後移住者（市町村別渡航順）」に依拠した移住者数が、先の第5表に示した数であり、宇検村からブラジルへの移住者は、戦前は73世帯440名、戦後は12世帯52名で、合計85世帯492名であった。

なお、本書内のもう一つの資料である「戦前渡航者国別ABC順」に依拠すると、この戦前渡航した73世帯は、1965年当時には94世帯と20世帯程多くなっている。これは、後述の「構成家族」という事情の他、移住時点から30年程も経過したことにより、今までの家族からの分離や独立がなされて増えたものと考えられる。

ここで、出身集落別移住者数を1965年当時の居住者数の資料から把握しておくとして、第6表に示すように中心集落湯湾の出身者が約58%と圧倒的に多く、次いで久志の16%、芦検の8.5%と続いており、調査対象として注目した芦検集落はとくに、戦前に移住者の多かった集落という訳ではない。ただ、戦後に限ると移住者の比率が高い集落であったことは注目されよう。

第6表 出身集落別ブラジル居住世帯数（1965年）

集落名	戦前移住	戦後移住	計	割合(%)
湯湾	55	6	61	58.1
久志	17		17	16.2
芦検	5	4	9	8.6
田検	4		4	3.8
名柄	4		4	3.8
宇検	3		3	2.9
部連	3		3	2.9
須古	1		1	1.0
西古見	1		1	1.0
生勝		1	1	1.0
平田		1	1	1.0
小計	93	12	105	100.0
不明	1		1	
計	94	12	106	

2) 『焼内ぬ親がなし』¹⁰⁾

1979年に発行された本書は、民族や産業を中心とした事実上の郷土誌に近いものであるが、この中に「海外移住」の項目が設定され、主としてブラジル移民に関する記述がある。これによると、渡航者総数は延200名とあるが、この中には大東島への渡航者56名を含んでおり、従ってブラジル関係者は150名程度となる。出身集落は芦検、湯湾、久志、宇検からであり、前2者は戦前3回、戦後1回の計4回、久志と宇検は戦前のみでそれぞれ2回と1回となっている。

しかし、我々のグループのききとりによれば、芦検では大正9年(1920)の第2回と昭和2年(1927)の第3回との間の大正13年(1924)に移民募集があり、30家族程が土地・財産を処分して渡航を待たしたが、船の都合で行けなくなったことがあったという。また、「当時はいもが常食でかゆも食べられない時代で、祭事のときのみ米を食べることができるほど貧しかった」。さらに「当時移民した人々は多少の財があった人々であった」ようである¹¹⁾。

それにしても、ここに示された渡航者数は、先に示した数と比べると三分の一以下でかなり少ない。本書作成当時のききとり調査によって把握しえた数のみをここには掲載したのではないかと推測されるのである¹²⁾。

3) 『在伯鹿児島県人発展史』

本書は鹿児島県出身の日系ブラジル人ジャーナリスト白石蜜義氏により、1979年に出版されたもので、ブラジルにおける鹿児島県出身者の諸活動や諸状況を記したものである。本書はB5版631頁の大著であるが、この大部分を出身者個人々の経歴、活動、状況などの記録が占めており、このうち奄美出身者20名が含まれている。この20名の市町村別内訳を示すと、宇検村7、笠利町4、名瀬市3、竜郷町2、与論町2、知名町1、瀬戸内町1である。また、本書には経歴や活動記録のある出身者の記述の他に、これ以外の出身者の名簿が一覧表にして掲載されており、ここに登場する奄美出身者は合計12名である。この12名の市町村別内訳は、宇検村9、笠利町・名瀬市・和泊町が各1である。従って、両者を合わせると合計32名が本書に記入された奄美出身者で、この市町村別内訳は、宇検村16、笠利町5、名瀬市4、竜郷町・和泊町・与論町各2・瀬戸内町1であり、半数が宇検村出身者であって、奄美内での宇検村の比率の高さを反映したものとなっている。

以上の3つの資料の検討から、第2と第3の資料は渡航者の一部を扱ったものであること、第1の資料が渡航者数に関しては最も正確であると考えられることがわかった。

2. 宇検村民のブラジルの移住の経過

前述の第1の資料に依拠して、戦前および戦後における渡航者数の年次別変化を示したものが第1図である。この図から、宇検村からブラジルへの渡航者数は1920～30年代が中心であること、その中でもとくに1918年、1924年、1930年にとくに多かったことがわかる。そこで、これらの年次の渡航者について、さらに詳しくみよう。

